

発表・講演要旨

『トロイラスとクレシダ』における医学

遠藤花子

シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』は問題劇ともみなされ、四大悲劇や『ロミオとジュリエット』などと比較すると、執筆された論文数も圧倒的に少ない作品である。しかし、16-17世紀の医学的な視点から見ると、ペストや梅毒をはじめ、主な治療法であった放血など、医学的要素が随所に散見される。梅毒については、コロンブスの船員がアメリカ大陸から持ち帰ってきたことで、ヨーロッパ全土に広がったとされてきたが、既に感染性の性病であることは知られていた。

本発表では、『トロイラスとクレシダ』を医学的に分析するとともに、梅毒にも焦点を当て、当時の人々がどのように病気に向き合ってきたのかを検証する。更に、シェイクスピアが『トロイラスとクレシダ』では、ガレノスに基づいた医学とパラケルススに基づいた医学のどちらに重きをおいていたのかについても明らかにする予定である。

エミリ・ブロンテの両極的な表現ーバイロンと北村透谷の比較からー

工藤由布子

「両極的な表現」とは、「天国と地獄」や「歓喜と苦悩」といった言葉が、作品内で対立的、あるいは融合的に使用されていることを言う。文学作品には、このような対立概念は多く用いられていて、例えば、天国と地獄を行き来する登場人物が居たり、乱れたり落ち着いたりする心の揺れ動きが作品の調子を作ったり、苦悩の中で歓喜の極点に達したり、心それ自身が地獄から天国を、天国から地獄を創る。これらの表現方法は一様では無いけれども、人間の生き方やその面白みを現すために利用されていると言えよう。エミリ・ブロンテの作品にも、このような両極的な表現が実に多用されている。本発表では、ブロンテの表現方法の特徴を考察するために、二元論的展開を作品内に示す北村透谷と、ブロンテと透谷が影響を受けたバイロンとの比較を行いたい。その結果、ブロンテの独自性を示しすることができるのではないかと思われる。

特別講演

英語の筋の通し方、日本語の筋の通し方

真野 泰

もう15年も前のこと、ある雑誌に学生の訳文と機械翻訳の訳文の奇妙な符合について書いたことがある。その後、機械翻訳の精度はずいぶん向上したものの、今でも、すこし長い文章を訳させると、文章というよりバラバラの文の羅列とい

う感じの訳文を示してくる（学生の訳文のバラバラ感も相変わらず）。その主因は、英語から日本語への翻訳の場合なら、英語の筋の通し方を日本語へいわば平行移動してしまうことにありそうだ。ここで「筋の通し方」というのは、テキストの結束性と一貫性、さらに視点の問題を含めてそうよぶことにする。具体的には、英語の人称代名詞、日本語の助詞（特に「は」）、文間文法、態（能動・受動）、話法、時制などが互いに絡み合うと考えているが、わたしの頭が整理されていない面もすくなくない。今回は、人間の翻訳者による英語から日本語への、また日本語から英語への翻訳を参考にしつつ、両言語の筋の通し方について整理を試みたい。